

その者、取扱い注意。

黒三葉サンダー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幼馴染みの恋を叶える為、恋路を邪魔する奴を妨害しつつ日常を謳歌する風間 幸太郎。しかしその日常は突如現れた魔方陣によって崩壊した！

異世界転移!?俺らが勇者パーティ!?うるせえ!そんなことより香織の恋路だバカ野郎!!

良かれと思って大暴走!幸太郎の運命はいかに!?

目次

これが伝説の始まり（大嘘）	1
飯食ってんだ。邪魔すんな！	8
今日は風が騒がしいな……吹いてないけど。	17

これが伝説の始まり（大嘘）

月曜日。それは学生にとって憂鬱な曜日であり、最もやる気が出ない日である。

特に土日にはっちゃけた奴がよりいっそうグータラになる恐ろしい日だ。まさに神が俺たちに科した試練と言つても間違いない。

つまり俺が現在進行形で走っているのも、そもそも残り五分で遅刻判定になつてしまふのも、途中で弁当を家に忘れてきたことを思い出したのも全ては試練。

要するに神さまが全部悪いのだ。

「うおおおおお!!」

しかし神さまからすればそれは俺のあまりにも身勝手な自己解釈としか見られまい。

口惜しや。何故俺は寝坊してしまつたのか。

いや、それは紛うことなき自業自得。人は睡魔に抗えぬのだ。

近年稀に見るトップアスリートの如き速度で走れば、もう既に校門が目と鼻の先であつた。

その狭き門を閉じようと今まさに手をつけ始めた教育指導の先生。言うなれば我が校の門番が俺の行くべき道を閉ざそうとしていた。

かの先生はその屈強な肉体のおかげで門を閉じるスピードが非常に早い。そのSA
S U K Eの如く鍛えられた肉体は決して飾りなどではないのだ。

（いけん！駄目だ！間に合わない！）

走りながらも俺の額をツーツと冷や汗が流れる。決死の表情で先生を見やれば、また先生もこちらへとその視線を動かした。かの先生との出会いから早二年。最早俺と先生の間と言葉など不要。視線が合うだけで思いは通ずるのだ。

校門突入まで、あと五秒。

『先生！後生だから五秒待ってください！』

『ようやく来たか風間。だが遅刻だ』

確かに思いは通じ合った。それだけは間違いない。

しかしその門は先生の悪い笑みと共に固く閉じられた。

やはりどこまでいっても先生は無情であった。

風間 幸太郎。全力疾走も虚しく、遅刻の烙印を回避出来ず教育指導室へと連行される。

遅刻回数、本日を持って二桁へ突入することのこと。



「——なんてことがあったんだとよ」

「他人事みたいに言ってるけど、それ風間くんの事だよね」
時は変わって昼休み。

S A S U K E 先生に熱血指導をされた俺は隣の席で10秒チャージを終えた友人と
気ままに駄弁りあっていた。

その間僅か三分。駄弁り量が少なすぎて泣けてくるぜ。

そんな無駄しかない会話の最中に感じる視線にチラツと目を向ければ、今か今かと
チャンスを伺う幼馴染み1号の姿が。2号はあいも変わらずイケメン力をキンキラに
ばら蒔いており、3号は1号の様子に苦笑いしている。

（おーけおーけ、任せとけよ1号。お前の出番はもうすぐ来るからな。スタンバってお
けよ）

我が友人の南雲ハジメくんはこの後に起きるであろう厄介事を回避するためか俺を
置いて眠りにつこうとするが、それは1号の為に断じて阻止させてもらうぞ！

「おや？南雲くんよ。まさか昼飯はそれだけというのかね？」

「え？そうだけど……」

「それはいけない！いくら徹夜明けとはいえ飯はしっかり食わんといけんよ！良ければ

俺の分を——」

俺の道化っぷりに何やら勘づき始めた南雲くん。しかしながら君のターンは終了だ！

さあ行け！対南雲用必殺少女よ！！その手に持った二つの包みを——ん？二つ？

「南雲くん！それだけじゃ足りないでしょ？私のお弁当分けてあげるね！」

「白崎さん……いいよ。僕はこれで足りるし、白崎さんに悪いよ」

「大丈夫！ちよつと作りすぎちゃったから、南雲くんに食べてほしいの。あ、幸太郎くんの分もあるよ！」

「へあ!?!」

かおりいいい!?!何をしているうう!?!ここは余計なモブである俺にまで弁当を用意する場面ではないぞおおおお!?!

それじゃあ南雲くんへの特別感が薄れるではないか！幼馴染みの俺の分を作った余りみたいになるじゃないか！

それに俺には南雲くんとは違い立派なお弁当さまが……ない!!

そうだ！我が家のリビングに置きっぱではないか!!

「幸太郎くん、また遅刻してたよね。幸太郎くんが遅刻する日は大体お弁当忘れてくる

もんね」

「ば、バレてーら……」

我らが天使カオリエルにはバレバレであつたらしい。

もう何度目か分からんけど、俺遅刻しないようにするわ。俺が遅刻すればその分だけかおりの南雲攻略が遅れてしまう。

そして俺という妨害札が正常に機能しないと、奴が……幼馴染み2号が来る。

「香織、幸太郎。こつちで一緒に食べよう。どうやら南雲はまだ寝足りないらしいし。それに香織の美味しい手料理を寝ぼけたまま食べるなんて俺が許さないよ?」

「アアアアアアアアアア」

「幸太郎……ごめん。止められなかったわ」

なんでなんでなんでええ!? どうして俺の仕事を増やすんだ2号おおお!! お前じゃカオリエルは無理なんだよおおお!!

「え? どうして光輝くんの許しがいるの?」

ほーれ見ろお! ド天然な1号にそんな気障な台詞は全然効かないし、何よりもう既にお前は対象になつてないんだよおお! カオリエルが選んだのは南雲くんなんだよ!!

しかも3号がコソツと後ろで笑つてるぞ! 龍太郎も何とも言えねえ顔になつてるし

!

「かゆ……うま……」

「こんな時によく食べれるわね」

「1号の飯は昔からうまいから無意識にな……」

「そ、そう。ち、ちなみにその卵焼きとかどう？」

「おん？そりやうまいぞ。なんか味が少し違う気もしないけど」

「っ！……良かった……」

「「チツ……」」

いつの間にか側に着ってきていた雫の質問に答えただけで南雲くんやイツメンを除いた野郎どもから舌打ちをされた件。あんだあテーマーら？さてはカオリエルの飯が目的だな？これは俺んだ、誰にも渡さねえぞ！

南雲くんは別だけどなあ!!

しかしカオリエルは何故そんなにニコニコとしてらっしやるん？なに？この弁当になにか盛った？普段だらしのない俺に対する報復的なイタズラでも施した？

「あのね、幸太郎くん。その卵焼きなんだけどね」

「っ、次は何をした？」

「もう、私は今回何も入れてないよ！実はその卵焼きは雫ちゃんが——」

「わああ！香織！」

「まさか……お前か幼馴染み3号!」

ビシツと指差し確認をしてやればビクツ!と反応を返す3号。ふつ、あまちゃんがり堂々としてりやお前が何かしたかなんて思わなかったのによお!

そして突如現れる目映い光を放つ魔方阵的な何か。

………what?

「なに!? 幸太郎!」

「っ!? 離れるなよ雫!」

皆が驚き戸惑う中、迷わず雫の手を掴んで引き寄せる。

するとほぼ同時に魔方阵が強く光り、俺の視界は真っ白になった。

飯食ってんだ。邪魔すんな!

目映い光が収まっていき、恐る恐る目を開くと知らないドーム状の天井だった。そして右手には何やら柔らかくてスベスベした感触。左手には弁当箱と箸。

「知らない天井だ……」

「なんで天井見てるのよ!前見て!前!」

「前?そうかこっち上だわ」

雫の言葉に従って顔を前に向けると、言葉にし難い光景が視界に飛び込んできた。

それは巨大な壁画だ。なんかいろんな景色とか金髪外人が書かれてるが、俺には一番気になることがある。

「なあ雫。あの絵って女性かな?まさか野郎じゃないよな」

「そこ!?!今気になるのがそこなの!?!」

「気になるじゃん。気にならない?」

「それは……少しだけ」

「だろ?」

「あの一、そろそろよろしいですかな?」

俺たちの足下から声が聞こえ、視線を今度は下に向けると何やら俺たちは知らねえおっさんたちに囲まれていた!!

思わずまだ掴んでた手を引つ張つて雫を俺の側に寄せ、あからさまな警戒心を出してやる。流石の俺も知らない奴らに囲まれてる状況なら雫優先するわ。

1号? 1号なら既に然り気無く南雲くんの側に寄つてるよ。こんな状況でもさらつと想い人の側に近付けるつてやるおるな。

やっぱすげえよ、1号は。

「ようこそ、トータスへ。勇者様、そしてご同胞の皆様。歓迎致しますぞ。私は、聖教教会にて教皇の地位に就いておりますイシユタル・ランゴバルドと申す者。以後、よろしくお願い致しますぞ」

何やら一番豪華そうな装備を施した好爺っぽい人が名乗りを上げる。

ああん? 教会? 教皇? ははーん。なるほど。分かったぞ!

教会でステンドグラスに描かれているのは大半が女性!

つまり!

「雫、この絵は高確率で女性だ……!!」

「幸太郎……ちよつとは空気を呼んで……」

「「「確かに」」」

顔を赤くした雫の言葉に、クラスメイトどころかおっさんたちまで頷いたのはとても解せん。

その後、俺たちはイシユタルなる人物に教会の外へと連れ出されたのだった。何度でも言おう。解せん!



場所は変わって、なんぞ豪華でデカイ部屋に案内されたでござる。イシユタルや愛ちゃん先生、幼馴染みズが上座に座っており、やっぱこいつら勇者パーティの主力なんやなあつてポーツとしたります。

俺? 長テーパールの最後方、南雲くんの隣だけど。

どうして自分から目立ちにいく必要があるんです? (マジレス)

でもさらつと3号に睨まれました。1号にも睨まれました。3号は「一人だけ逃げるな」、1号は「南雲くんの隣はズルい」ってことを言いたいんですね分かります。

……俺は勇者側じゃないからね! 仕方ないね!

「……」ペコリ

「あ、どうも。お仕事お疲れ様です」

「……」ニコッ

飲み物の支給をしてくれたメイドさんにお礼を言うと、愛想笑いをしていた。た。

うーむ。愛想笑いだと分かっていても可愛い。野郎の悲しい性。南雲くんにも同意を求めようと思つたけど、1号がニコニコしながら南雲くん見てるから止めといてあげよう。風間 幸太郎は空気を読める男だ。

え？俺に来る3号の視線？でえじようぶだ。今のところは問題ない。ええ、今のところは。

因みに他の野郎どもはデレデレしおつてからに女子から冷たい眼差しを受けていた。俺にも冷たい眼差しが来てたけどそいつらには満面の笑みを浮かべながら手を振って差し上げた。顔反らされたけど。解せぬ。俺が何をしたというのか。

「さて、あなた方においてはさぞ混乱していることでしょう。一から説明させて頂きますのでな、まずは私の話を最後までお聞き下され——」

この後延々と胡散臭いじいさんの話が続いていくが、どうせ南雲くんとか幼馴染みズがしつかり聞いてくれるだろうし俺はお昼の続きを取ることにした。幸いにも弁当はそのまま持ってたので一安心だ。

お、このアスパラベーコンの塩加減ええやん。流石カオリエル、俺の味覚を分かつて

らっしやる。にしてもこの卵焼きの味も食つてると中々に中毒性がある。甘しよっぱい味付けがいいね。

でもあれだな。この状況って十中八九元の世界に返してくれないパターンが多いよね。

つてことはこんな風に日本の飯が食えるのもこれが最後ということか……。

ちよつとしんみりしながらおかずを口に運んでいると、周りからの視線がチラホラと俺に向いていることが分かる。なんだよ。君らちゃんと食つてたでしょ。

うーん、これメイドさんに頼んで似たような料理とか出来ないかね？

「……」チラッ

「?」コテン

「oh……」

先程支給をしてくれたメイドさんを見れば、愛想笑いをしながら小首を傾げた。うーん、可愛い。控え目について最高としか言えな——

ピシヤアアアアン!!

その時俺の背に電流走る!その原因は今まさに此方をガン見している3号である!少し前の1号並みにニコニコしている。俺はこの話し合いの後に死ぬかもしれない。せめて死ぬ前に美少女か美女に膝枕してほしい人生だった。

「ふざけないで下さい！結局この子達に戦争させようってことでしょ！そんなの許しません！ええ、先生は絶対に許しませんよ！私達を早く帰して下さい！きつとご家族も心配しているはずですよ！あなた達の上にいることはただの誘拐ですよ！」

「フアツ!!」

愛ちゃん先生が怒り心頭で立ち上がり猛然と抗議を始めたのでマジでビビって変な声が出たぜ……。

つてか何？戦争？いつの間にそんな話が進んでた訳？

あの優しいロリ先生を本気で怒らせるなんざあやべえ奴らやで。

あ、メイドさん止めて。そんなクスクス笑わないで。流石の俺も恥ずかしいぞい！

「お気持ちはお察しします。しかし……あなた方の帰還は現状では不可能です」

「なっ!!」

イシユタルの言葉に愛ちゃん先生とクラスメイトたちが動揺するが、何やら隣の南雲くんだけは油断せずに相手を観察している、風に見えなくもない。

「ふ、不可能って……ど、どういうことですか!!? 喚べたのなら帰せるでしょう!!」

「先ほと言ったように、あなた方を召喚したのはエヒト様です。我々人間に異世界に干渉するような魔法は使えませんのでな、あなた方が帰還できるかどうかかもエヒト様の御意思次第ということですね」

「そんな……」

イシユタルの無情な言葉にシヨックを隠せない愛ちゃん先生の姿に加え、帰れないという事実が皆に重くのしかかる。

そして勿論それだけで済む筈もない。

「うそだろ? 帰れないってなんだよ!」

「いやよ! なんでもいいから帰してよ!」

「戦争なんて冗談じゃねえ! ふざけんなよ!」

「なんで、なんで、なんで……」

「そーだそーだー、おーぼーだー」

知らない土地にいきなり飛ばされて、知らないうちに勇者パーティに仕立てられ、しかも帰れませんだもの。

こんなんキレるのも仕方ない。かくいう俺も今頃我が家をつくだ煮を作ってるであらう婆ちゃんのこと心配だ。

だがここで騒いだところで解決なんてするわけも、俺たちを帰してくれるわけでもないだろう。

ほうれ見ろ。イシユタルのあの冷えきった瞳。ありや、ろくでなしの瞳だ。じつくりこつちを観察してやがる。

あ、因みに最後の台詞は俺です。

にしてもそろそろあれだ。我らがイケメン枠、2号が動き出すな。んで2号は良くも悪くもお人好しだ。そりやもうご都合全開でだ。いやーキツいつす。しかも聞いた限りじゃこれ、人類救済系の戦争っしょ？

勇者様！魔王を倒して人類を救って下さいまし！的な。

いやー本当にキツいつす。何が一番キツいつて、これ2号がやらかすな。そこに関しては圧倒的信頼があるぞ。

そしてその予想は見事に的中してしまふ。

「皆、ここにイシユタルさんに文句を言っても意味がない。彼にだってどうしようもないんだ。……俺は、俺は戦おうと思う。この世界の人達が滅亡の危機にあるのは事実なんだ。それを知って、放っておくなんて俺にはできない。それに人間を救うために召喚されたのなら、救済さえ終われば帰してくれるかもしれない。……イシユタルさん？ どうですか？」

「そうですね。エヒト様も救世主の願いを無下にはしませんまい」

「俺達には大きな力があるんですよね？ここに來てから妙に力が漲っている感じがします」

「ええ、そうですね。ざっとこの世界の者と比べると数倍から数十倍の力を持っていると

考えていいでしょうな」

「うん、なら大丈夫。俺は戦う。人々を救い、皆が家に帰れるように。俺が世界も皆も救ってみせる!!」

はい!! 終わり!! 閉廷!! 解散!!

もおおやだああああこいつあああああ!!

心の中で大泣きしながらも、冷めてしまったハンバーグを口に運んだのだった。

悲報、俺ら戦争から逃れられない模様。

今日は風が騒がしいな……吹いてないけど。

なんだろう。何故だろうか。

目の前の光景にギリギリと歯軋りをしてしまう程には感情が荒ぶっている。

「何故……俺はこんなものを見せられている……!!」

「お、落ち着いて風間くん。ステイステイ」

俺の豹変にギョツとした南雲くんが俺を宥めようとするが、すまん。この光景は俺には目の毒なのだ。

だから止めてくれるな、我が友よ。

ああ！何故！何故なんだ！

「何故ジジイとおっさんのキスシーンを見せられねばならぬのだ……!!」

「「「ブフツ！」」」

イシユタルの手に王様がキス（偏見）をしているのだ！

今一度問おう!!

何が悲しくてジジイとおっさんのキスシーン（誤解）を見せられなければならぬのだ

!!

俺の声は静かに、されど怒りに満ち震えていた。その声はどうやら南雲くん含め近くにいたクラスメイトたちにも聞こえていたらしく、殆どの奴らが顔を反らして吹き出した。

ふむ。俺の発言に変な妄想でも成り立ったか。だが俺は謝らない。美女とイケメンの絡みならともかく、ジジイとおっさんで再現しても吐き気が込み上げるだけである。

幸いにもイシユタル含めた王族の方々には聞こえていなかった。

あん？その後？なんのこともない、ただの自己紹介タイムよ。

王様のヒドラーさんと王妃のルルイエさん、王子のシャンデラさんに王女のリリーラさんです（大嘘）。

まあどうせあんまり関わることは無いだろうし、関わるとしてもガッツリ猫被ればいいい。

なんの問題ですか？なんの問題もないね！

因みに一番警戒しなければならんっぽい奴は王子でした。なんやあいつ、1号に釘付けやんけ！

何見てんだよ！1号は南雲くんのやぞ!!

王女？ありや2号見てるよ、うん。決して俺を見てる訳ではない。俺と被るような位置にいるから勘違いしやすいが、モブである俺を見る必要皆無だからね。

……こつわ。気配消しとこ。

その後、晩餐会が開かれ皆が異世界料理に舌鼓を打つ中。俺は一人バルコニーにて誰にもバレないようにひっそりと息を潜めて星を眺めていた。

んやー、異世界言うても星空は綺麗だかんねー。

……流石の俺もふざけてばかりいないで腹決めとかんといけん。向こうでも欠かさず鍛練はしてたが、戦争とは縁遠い日本でこんな技術を覚える必要はないって思ってたんだけどなあ。

かおりと同じように、一般家庭で育って、普通に出会って、恋をして。何度も懂れて、夢想した。

「でも、これで良かったんだよな」

そうだ。この人生に絶対に価値はある。俺がやられてきた時代錯誤な躰だって、あいつの力になれる。

俺じゃダメだ。お姫様の相手はたったの一人。

なら俺はその幸せを得るための手伝いをする。

それでお前が幸せになれるのなら。

(……二人だけでも、必ず元の世界へ。たとえそれが無理でも、お前の幸せだけは必ず

……はっ!?)

珍しく人がしんみりとしてると言うのに、何やら此方へと接近する人の気配。この気配は先程感じたもの!

リリー王女!! 貴様! 来ているな!?

俺の直感が出会ったら面倒なことが起きると警報をならしているので素早くへりへ。

そして迷わず飛び越えてエルード!!

「?」

しばらく足音が聞こえていたが、数分後には遠ざかっていったので少し頭を出してチエツク——

「えっ? 幸太郎?」

「むむ? 雫か——」

どうやら入れ替りで3号がこっちに来てたらしい。少し気を抜いてしまったせいか気付かんかった。

さてさて。ここで考えてみてほしい。俺たちは未だ飛ばされた時のままの格好、つまり学生服な訳だ。

そして女子は勿論スカート。

次に考えてほしいのは俺たちの立ち位置だ。

俺はエルードの復帰途中故に3号を見上げるように、対して3号は下から突如現れた俺を見てる為に視線を下に向けている。

つまり。今俺の目の前に絶景が広がっている。

無論それに気付かないほど3号は鈍くはない。故に俺の中でこの絶景を脳内シャッターで高速百連写する。

みるみると面白いくらい赤くなっていく3号の顔に、徐々に近付いてくるタイムリミット。今の俺には抗う手段は、ない。

「……お粗末!!」

「っ!!! 見るな馬鹿ああ!!」

「グワーツ!!」

この夜、王宮の外で憐れな男の悲鳴が星空に響いたのだった。

あ、与えられた部屋はとて豪華で寝心地良かったです。



すっかりと昨日の絶景が記憶内フォルダに保存されていることを確認し、朝から欠伸を噛み殺しながらメルド団長なる人物の話聞いていた。

メルド団長は話してみると中々にラフな部分があると言うか、豪快と言うべきか。いやはや話していて楽しい人物で好感が持てるぞい。

因みに昨日3号にぶっ飛ばされて落ちた俺を救助してくれたのは団長だったりする。

メルドさーん！メルドさーんありがとー！メルドさーん！

「よし、全員に配り終わつたな？このプレートはステータスプレートと呼ばれている。文字通り、自分の客観的なステータスを数値化して示してくれるものだ。最も信頼のある身分証明書でもある。これがあれば迷子になっても平気だからな。失くすなよ？

……あとそこ、プレートで遊ぶな！」

「うえい!？」

さつき渡されたシルバークプレートを投げて遊んでいたら怒られたでござる。

にしてもこれが身分証とな？しかも迷子お助け機能つき。……こいつもしやGPSでも仕掛けられてんの？

「プレートの一面に魔法陣が刻まれているだろう。そこに、一緒に渡した針で指に傷を作って魔法陣に血を一滴垂らしてくれ。それで所持者が登録される。ステータスオープン」と言えば表に自分のステータスが表示されるはずだ。ああ、原理とか聞くな

よ？そんなもん知らないからな。神代のアーティファクトの類だ」

「アー「だんちよー！アーティファクトとはなにかねー!?」……幸太郎」

ふっ、2号。お前の発言タイミングは把握してんだよ。

この前の意趣返しだこのやろう!!

「お前ら……ん、んん。アーティファクトって言うのはな、現代じゃ再現できない強力な力を持った魔法の道具のことだ。まだ神やその眷属達が地上にいた神代に創られたと言われている。そのステータスプレートもその一つでな、複製するアーティファクトと一緒に、昔からこの世界に普及しているものとしては唯一のアーティファクトだ。普通は、アーティファクトと言えば国宝になるもんなんだが、これは一般市民にも流通している。身分証に便利だからな」

「だってよミツテル」

「光輝だ！幸太郎は真面目に聞かないか！」

「H A H A H A！」

俺の軽い態度に顔をしかめた2号に怒られるが、無駄だ！

お前のお説教はこの俺には通用しない！お前じゃあ俺を止めるには役不足なんだよミツテルうろう！

「幸太郎くん？」

体力：120

耐性：120

敏捷：180

魔力：180

魔耐：20

技能：

風魔法適性・巻物作成・鎌術・剣術・体術・隠形・毒耐性・麻痺耐性・痛覚軽減・挑
 発・魔力操作・言語理解

||

はあん？なあにこれえ？判断素材無さすぎて良いのかそうでも無いんか分からんぞ。
 もつと親切設計にしろ！

「はあ、幸太郎。針を使えと言つたろう。全員見れたな？説明するぞ？まず、最初に「レ
 ベル」があるだろう？それは各ステータスの上昇と共に上がる。上限は100でそれ
 がその人間の限界を示す。つまりレベルは、その人間が到達できる領域の現在値を示し

ていると思ってくれ。レベル100ということは、人間としての潜在能力を全て発揮した極地ということだからな。そんな奴はそうそういない」

おんおん？つまりレベルが上がったからステータスが上がるって訳じゃないと言うことかい旦那。

「ステータスは日々の鍛錬で当然上昇するし、魔法や魔法具で上昇させることもできる。また、魔力の高い者は自然と他のステータスも高くなる。詳しいことはわかっていないが、魔力が身体のスペックを無意識に補助しているのではないかと考えられている。それと、後でお前等用に装備を選んでもらうから楽しみにしておけ。なにせ救国の勇者御一行だからな。国の宝物庫大開放だぞ！」

うえ……まあだ鍛練ですよクオレハ。にしても魔力でスペックが上がるとな。ははん？さては気功だなオメー？

俺は詳しいんだ！嫌でもな！

「次に『天職』つてのがあるだろう？それは言うなれば『才能』だ。末尾にある『技能』と連動していて、その天職の領分においては無類の才能を発揮する。天職持ちは少ない。戦闘系天職と非戦闘系天職に分類されるんだが、戦闘系は千人に一人、ものによっちゃあ万人に一人の割合だ。非戦闘系も少ないと言えば少ないが……百人に一人はいるな。十人に一人という珍しくないものも結構ある。生産職は持っている奴が多いな」

「HEY！団長！転職を希望だぜ！！」

「それは出来ない！お前はその才能で満足しろ！」

oh……団長辛辣う……。

確かにこれ以上の職は無いけどよお……。

でもどうせならもつと面白そうな天職が良かったぜ。

「後は……各ステータスは見たままだ。大体レベル1の平均は10くらいだな。まあ、お前達ならその数倍から数十倍は高いだろうがな！全く羨ましい限りだ！あ、ステータスプレートの内容は報告してくれ。訓練内容の参考にしなきゃならんからな」

「ファツ!? そんなに高いん!? 現地人のスペック低すぎい！いや俺らのスペック高すぎ……!？」

他のクラスメイトたちも浮足立ってるのが見え見えだが、ただ一人。

南雲くんだけが顔を青くしているのを発見した。

ま、まさか南雲くん……お前……!

(HEY！南雲くん。もしかしてお前……)

(か、風間くん……。僕、ステータスが全部10、なんだけど……)

(アイエエ……)

そつと小声で南雲くんを確認を取ると、案の定だった。

おい神様よお！そんなに南雲くんが嫌いか!? ええ!?

南雲くんは良い奴なんだぞ！俺みたいなやべえ奴ともコミュニケーションしっかり取ってくれる優しい奴なんだぞお!?

あ、言つて悲しくなってきたわ。

「ほお、流石勇者様だな。レベル1で既に三桁か……技能も普通は二つ三つなんだがな……規格外な奴め！頼もしい限りだ！」

「いや、あはは……」

メルド団長の褒める声とミツテルの嬉しそうな照れ声。

ちっ！やっぱりあいつはチートだったか！スペックを確認してなかったから詳しくは分からんがあのでイケメン野郎のことだ。チートじゃない筈がない！

ま、不味いぞ。さつき団長はステータスプレートの内容は報告しろと言っていた。南雲くんのスペックは現地人と同レベル！他の奴らのスペックを見てから南雲くんのスペックを見たら顔に出ること必至!!

そうなればこれ幸いと檜山たちが晒し上げてくるのは必然！

「じゃあ次は——」

「俺がいくぜ!!」

南雲くんの晒し上げは1号が悲しみ、傷付くだろう。

そしてミツテルはそれを庇おうとはしない。

俺はそれを許容出来る程腐っちゃいない。

「どれどれ——」

「メルド団長」

ステータスプレートを渡しながら、たった一言。

「南雲くんのこと、くれぐれもお願ひしますよ」

「……っ！」

晒し上げるようなことをすれば、ただでは済まさない。

暗にこう告げた俺の言葉は、表情を固くした団長を見れば正しく伝わったことが分かる。

「……分かった。善処しよう。にしてもお前も凄いなステータスだな。総合でいえば勇者より高いが、極端に魔耐が低いのが気になるな。だが何よりもこの魔力操作という技能だ。これは魔物や魔族が保有する技能で、我々人間では保有出来ない技能の筈だが……」

ステータスプレートを受け取って戻ろうとすると、団長にそんなことを言われた。心当たりが無くもないのがつらたん。

「あー、そりゃあってもおかしく無いかもですね」

「なに？」

「だって俺の一族は、風の悪魔に憑かれていますから」

そのまま踵を返して、歩き出す。その時に不敵な笑みを浮かべるのも忘れない。

ふっ！決まった！